



Title	「私的」重要文化的景観論：そこにしかない風景
Author(s)	平村, 徹郎
Citation	アイヌの伝統を基層にした多文化な景観：北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 24-25
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92875
Type	report part
File Information	ronshu_biratori (14).pdf



[Instructions for use](#)

「私的」重要文化的景観論

そこにしかない風景

平村徹郎
株式会社平村建設 代表取締役

はじめに

景観や風景の感じ方は、その人の生き立ちや経験に依るところが大きく、それぞれ記憶に刻まれ、印象に残るものだと思います。私は15歳までを平取で過ごし33歳で帰郷するまで道内・外で生活し、帰郷後まもなく平取町が重要文化的景観に選定される事実を知り、「ある意味の納得」とともに「違和感」を覚えた記憶があります。

私の経験として、西日本の農山村漁村でインフラの計画・設計を行うなかで、多くの風景を眺め、そして文化に触れ、都度、驚きと感動を得ました。

とりわけ印象に残るのは、愛媛県宇和島市の「遊子水荷浦の段畑」で、いくつもの疑問を喚起させ、深く印象に残っています。遊子水荷浦を初めて見た私が発した言葉は、「わ！何これ！」というような感嘆詞で、のちに振り返ると「鮮烈」、「違和感」、「壯観」、「ここにしかない風景だ！」という印象です。それはまだ、重要文化的景観となる前の遊子水荷浦でしたが、その風景と同時に平取が重要文化的景観に選定された事実、冒頭に記す感情を覚えたのです。

重要文化的景観「平取」iworの私的解釈

平取の重要文化的景観においては、アイヌの生活様式や文化から定義されるイオル(iwor)という概念が、ほかの地域の方々からの理解を難しくしているのかもしれませんが。

これは漁撈や農耕、そして祭りなど、日本人の多くに共通する情報や既視感ではなく、「狩猟・採取」に基づくアイヌの行動・生活様式と、日本列島に住む多くの人に通底する自然崇拜とは「別の解釈・物語」として独自に近代まで息づいてきたこと、こうした点が冒頭の「違和感」の由来だと考えています。

私が感じるままに誤解を恐れずに本来の定義を補足すると、「人間生活の傍らで、精霊たちがすぐそこに息づいているかのような森や水辺、そうした空気感を現代でも感じられる唯一無二の場所ではないか」、というイメージ(神秘性)です。

神秘性・精神性の根源

沙流川流域は背後にポロシリが鎮座し、流域の特定の場所からのみ荘厳な雄姿を眺められること、またアイヌによるポロシリ崇拝とそのエピソードが流域全体の神秘性(精神性)を湧出させていると思います。そのことはユカラ(叙事詩)、ウウェペケレ(言い伝え・昔話)として残され、この中でポロシリは登ることを許されない「禁忌の山」であり、その禁を破って



写真1 平取町芽生地区<町営牧野とチノミシリ>

しまう人の物語や、山頂付近に暮らすといわれる神々や海洋生物について語られています。

現代ではポロシリは日本百名山として登山者に人気である一方、額平川ルートは渡渉（源流を幾度か横断）しながら山頂を目指すため、その安全は天候に左右され、時には無理をする登山者が命を落とす事実もその神秘性を際立たせ、前述のアイヌの伝承から「カムイの意に反した」と解釈、結び付けることは容易でしょう。

「自然に触れさせて体感させてください」というアイヌ文化特有の精神性はおそらく百名山の中でもひときわ特異な環境・空気感であろうと思います。山菜やサケなどの狩猟・採取においても必要な量だけを分け前として譲り受ける、こうした精神性にも表れていると思います。（現代的解釈だとエコロジー、サステナブルというところでしょうか）

一方、私の原体験としては、新緑や生命の息吹を感じる山河はもちろんですが、厳冬期の早朝に豊糠・芽生の人工物が何一つ見当たらない森林の中で、深々と降り積もる雪の中にひとり身を置くと、「この世界には人間はただ自分ひとりでは…」と錯覚するような感傷と同時に、目に見えない別の息吹のようなものを感じます。こうした空気感・神秘性を感じるのは私だけでしょうか。

おわりに

写真2は平取の「びらとり」たる所以を今に残す景観の比較です。重要文化的景観一次選定箇所にあたるパンケピラウトウルナイ、パンケピラウトウルナイと四次選定申出が予定されるピラウトウルコタン（現平取町本町）、また沙流川（シシリムカ）の現在と136年前の対比です。左上1887年の写真中、○の位置はピラウトウルコタンの長であるペンリウクのチセとされ、英国人女性旅行家イザベラ・L・バードが3泊4日にわたり逗留した場所でもあります。バード研究の第一人者である金坂清則京都大学名誉教授は次のように話します。

『バードが来町した1878年当時の日本は開国後20年ほどで、世界に開かれた場所は一部の港湾都市のみでした。こうしたなか、なぜ平取に多くの英国人をはじめとした外国人が訪れたのでしょうか。彼らは日本の、あるいは北海道の一地域として、たまたま訪れたのではなく、わざわざ平取を目的地として目指していたのです。【世界地史上の平取】であることを理解すべきです。』

『全国に名をはせる「びらとりトマト」をはじめとする農畜産物も加わって一層多様性を増している平取の魅力が、日本国内のみならず世界の人々を引き付けるには新旧の文化的景観が歴史の中で形成されてきたことへの住民意識の認識が不可欠であり、チセの再生は意義があることだと考えます。』

私はイオルの再生やピラウトウルコタンの再興という文脈の中で、アイヌ文化に理解や共鳴のない人でも、「五感に問う」ような旅の体験を通じて、こうした精神性・神秘性に気づく人が少なくないものと考えています。

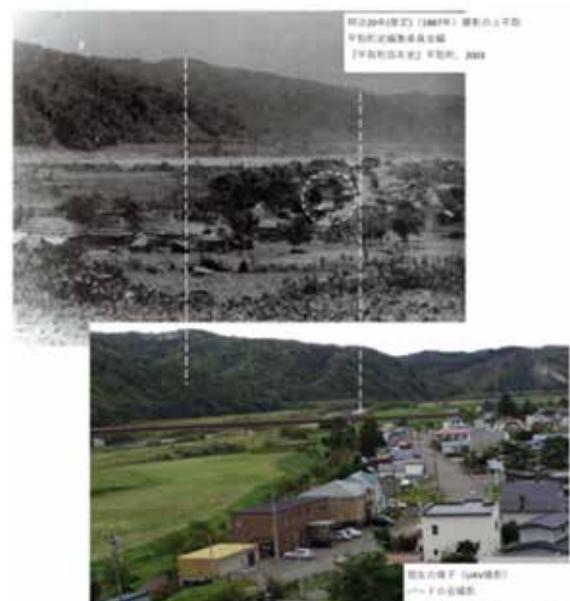


写真2 ピラウトウルコタンに見る新旧文化的景観